

Gazdag Erzsi (文), Reich Károly (絵) による 3 つの絵本 『Itt a tavasz』『Itt a nyár』『Itt az ősz』 翻訳の試み

和田 幸子

キーワード：ハンガリー語絵本・翻訳・ハンガリー人

要旨

本稿では、Gazdag Erzsi (文), Reich Károly (絵) による 3 つの絵本の翻訳と解釈を試みた。1967 年ハンガリーの Móra 社出版の『Itt a tavasz』は「春が来た」と訳すことができ、花が咲き、小動物が動き出し、心躍る展開である。3 行詩の繰り返しが心地よいリズムを創り出している。1977 年出版の『Itt a nyár』は「夏が来た」と訳することができる。人の姿をした太陽が至るところを照りつけ、上空からパラト湖に姿を映す。青色で描かれた水の流れがエネルギー溢れる。その風景の中で、砂の城に馬に乗った王様が現れ、ファンタジーの世界が広がる。1978 年出版の『Itt az ősz』は「秋が来た」と訳することができる。更けゆく秋の景色の中、砂の城を荒らしたのは誰か、と問う。異国民襲撃の歴史を持つ自国の不幸な歴史を飲み込むことができないハンガリー民族の苦悩と、郷土愛の双方向を行き来する。

I. 絵本の翻訳について

1. 海外の絵本の翻訳をめぐる問題

絵本とは、本の形態を持ち、絵と言葉を使って語る表現ジャンルである。19 世紀末、印刷技術の登場に乗じて、イギリスで小動物の登場する絵本が流行し、主に英語圏で発展した。戦後、日本においては、海外の絵本の日本語翻訳紹介が開始され、そして日本人の作家による絵本も作られるようになった。出版数が伸び、1970 年代には絵本ブームと呼ばれる時期を迎えた。このように海外の絵本を受け入れながら日本の絵本文化は発展してきた（絵本専門士委員会 2020）。

海外の絵本は、日本語に翻訳されることによって、我々が楽しめるものになる。つまり、海外の良い絵本

作品を取り上げ、日本語に翻訳する人の存在が必要である。ここで、1964 年に翻訳された『ちいさなうさこちゃん』と、それに続く「うさこちゃんシリーズ」絵本について紹介する。ここには、うさぎの女の子の日常の生活が描かれており、今日に至るまで、0.1.2 歳児を対象とした優れた絵本とされている。15.5cm の正方形、見開き 12 場面の各右ページに、D. ブルーナによって描かれたうさぎの女の子がいつも正面を向いている。ここではブルーナカラーと呼ばれる赤、青、黄、緑、の色が使われている。各左ページには、最小限に選ばれた 4 行の語りが載せられている。これらの特徴が幼い子どもの興味を惹くのであろう。この絵本の翻訳を担ったのは、児童文学者の石井桃子であった。オランダ語で書かれていたこの絵本を、石井は在日オランダ大使館関係者に朗読してもらい原文の語感のように翻訳した（森本 2015）。まず、うさぎの女の子を、うさこちゃんと命名した。オランダ語に精通していたわけではない石井が、この絵本の翻訳に際し息吹を吹き込んだことは興味深い。対して、同シリーズの後半の作品は、英語の翻訳版をもとに日本語に翻訳されたものである（森本 2015）。英語版ではうさぎの女の子がミッフィーと名付けられていたことから、角野栄子による翻訳絵本ではミッフィーの名で登場しているほか、石井訳とは異なる語調となっている。翻訳者による言葉の選び方の特徴はあるであろうが、原語であるオランダ語から翻訳するのか、一旦英語訳になったものをさらに日本語訳にする、ということから生じた差異もあるように考える。この例から、英語を介してではなく、原語から翻訳することが望ましいと考える。

しかし、英語のように多数者に用いられ翻訳者も多い言語の絵本に比べ、少数言語による絵本は翻訳者も少ない。その結果、少数言語の絵本に我々が触れる機会は少なくなる。

2. 少数言語であるハンガリー語絵本の日本語翻訳について

ハンガリー語は、ヨーロッパのほぼ中央に位置する国、ハンガリーとその周辺で話される言葉である。ラテン文字を使うが、インド・ヨーロッパ語族とは異なるウラル語族に属し、語彙や文法はヨーロッパの言葉とは異なる性質を持つ（早稲田他 2019）。ハンガリー語を話す民族が9世紀末にヨーロッパにきたことに起因するのであるが、その後のハンガリー人の歴史は波乱に富んでいる。モンゴル族の来襲、オスマン・トルコによる侵略と最大の都市ブタペストのシンボルであるブダ城の破壊、オーストリア・ハプスブルク家による支配、と大国に圧迫され虐げられてきた。自分たちの民族と言語がいつ滅びるかもしれないという危機感を抱く中で、ハンガリー人は民族のアイデンティティーのよりどころとしてハンガリー語を保持・育成してきたのである。

二つの世界大戦を経て、ハンガリーは国土の3分の2を周辺諸国に割譲することになり、このことによって国境外にハンガリー人が取り残されることになった。つまり、ハンガリー語を話す人々は、ハンガリー国民、および周辺諸国に住むハンガリー人ということになった。一方、ハンガリーは第二次世界大戦後、旧ソビエト連邦の傘下のもと1989年まで、社会主義国として歩んだが、この間のハンガリーにおけるロシア語教育は全く成果を上げなかった。政治的圧力に対する反感や、言語的、文化的、宗教的にもロシアとの結びつきが弱かったからと考えられている（早稲田1993）。このように、ハンガリーは複雑な歴史を持つ国であるが、その間、自らの言語を護るという意識を持ち、ハンガリー語が民族の独自性の象徴であることを貫いてきたのである。

現在、ハンガリーの人口は977.8万人である。周辺諸国を含めて、ハンガリー語を使用する人たちは1000万人ほどであろう。ハンガリー語は少数言語であると言える。

旧ソビエト連邦の支配の間、ハンガリーは独自の文化を発展させていった（鈴木2019）。絵本も西欧の影響を受けず、ハンガリーの絵本の創作がなされてきた。まず、色調が明るい。これは西欧諸国よりも温暖で四季の変化に富むからであろうか。ハンガリー語の長音、母音調和の法則に即した接尾辞の変化、といった特徴

から、言葉のリズムが生き生きとしている。

ハンガリーの絵本で、日本語に翻訳されているものを挙げる。Marék Veronika（マレーク・ヴェロニカ）（絵・文）、徳永康元（訳）の『ラチとらいおん』は日本でもよく知られた作品である（注1）。Veronikaはブルンミという熊、キップコップという小人が登場するシリーズ絵本も作成しており、これらの作品は羽仁協子により翻訳されている（注2）。Reich Károly（レイク・カーロイ）（絵）の作品は内川かずみやマンディ・ハシモト・レナによって翻訳されている（注3, 4）。ハシモトはRéber László（レーベル・ラースロー）（絵）の作品も翻訳している（注5）。これら数少ない翻訳家によって、ハンガリーの文化の一つである絵本が日本に紹介されている。自国の言葉と文化を護ってきたハンガリー人の気概を負って翻訳に取り組んだことであろう。これらの、日本語に翻訳された絵本を読む限りであるが、登場人物に語らせる言葉は詩的であり、人の生き方を凛と示すものである。教訓的なものは見当たらない。ハンガリーという国は、このようにして人を育てる土壌を持つ国なのかと感じさせられる。

現在、日本でハンガリー語を専攻できるのは大阪大学外国語学部のみである。専攻生はハンガリーに関わる研究を経て卒業する。彼らの中から今後、ハンガリーの絵本に興味を向ける学生が生まれることを望む。なぜなら、ハンガリーは充実した絵本文化を持つのであるが、我々は翻訳絵本を通してのみハンガリー人の意識、文化を知ることができるからである。

3. 3つの絵本『Itt a tavasz』『Itt a nyár』『Itt az ősz』について

「Itt a tavasz」「Itt a nyár」「Itt az ősz」は、ハンガリー人 Gazdag Erzsi（以下、G. エルジ、と記す）（1912-1987）によって書かれた詩である。「春が来た」「夏が来た」「秋が来た」と訳すことができ、ハンガリーの季節の光景が表現されている。

これらの詩を絵に描いたのは Reich Károly（以下、R. カーロイ、と記す）（1922-1988）である。R. カーロイは、バラトン南湖岸のバラトンセメシュで育ち、ブタペストで活躍したイラストレーター/絵本画家である。幼少期に触れ合った小動物、虫を描くことをテーマとし、明るい色を用いて大胆に描く画家である（Reich Károly Original Paintings 2007）。絵本化す

ることによって、G. エルジのこれらの詩に、より多くの子どもたちが触れるものとなったであろう。絵本『Itt a tavasz』『Itt a nyár』『Itt az ősz』は、Móra 社より、それぞれ 1967 年、1977 年、1978 年に出版された。日本語翻訳は未だなされていない。

ハンガリー食品・雑貨輸入販売店コツカマチカでは、日本語版が出版されていない絵本について、簡単なストーリー解説を提供している。筆者はこれによって、少数言語であるハンガリー語で書かれたこれら絵本の、その内容をわずかに知ることができた。そこで、ハンガリー語の初学者である筆者は、これら 3 つの絵本の翻訳を試みることにした。翻訳に際し、在日ハンガリー人の Pápai Eszter 氏の助言を受けている。

なお、G. エルジは詩「Itt a tél」(「冬が来た」)も創作している。これは Keresztes Dóra が絵を描き、絵本として Móra 社から出版されている。しかし、R. カーロイによる 3 つの絵本がそれぞれの季節の風景をパスとふと筆でおおらかに描いているのに対して、「Itt a tél」は冬の特徴的な具象物をイラストにしており、趣が異なるため、本稿では取り上げない。

これら 3 つの絵本の中で砂遊びをする子どもの姿がある。また「砂の城」という単語が登場する。なぜ R. カーロイはこのような場面を描き、G. エルジは何を伝えたかったのであろうか。このことを推察するためにも、日本語翻訳が必要であると考えた。

4. 本稿の目的

本稿の目的は、3 つの絵本『Itt a tavasz』『Itt a nyár』『Itt az ősz』の翻訳草稿を提示することである。筆者は、幼児の年齢の子どもたちが理解できるように、また、この詩を G. エルジの語りと捉えて、語りかけることを意識して翻訳する。本稿をたたき台として、今後、ハンガリー語および、児童文化に精通する人に修正が重ねられることを望む。そのことによって、ハンガリーの絵本文化を日本の子どもたちが味わうその一歩となることを願う。

Ⅱ. 方法

『Itt a tavasz』『Itt a nyár』『Itt az ősz』、それぞれを翻訳する。早稲田みか他著『ハンガリー語単語集』、今岡十一郎編『簡約ハンガリー語辞典』を用いるほか、

インターネット上の辞書『vulkán Adys』も利用する。これらの絵本は、ページを見開くと、左ページ、右ページ、それぞれに詩に対応した絵が描かれている。そこで、ページ数と原詩を載せ、それに対応するように翻訳案を記す。

また、翻訳をもとに、解釈を記す。

Ⅲ. 3 つの絵本『Itt a tavasz』『Itt a nyár』『Itt az ősz』の翻訳

1-1. 『Itt a tavasz』の翻訳

絵本『Itt a tavasz』は Móra 社より 1967 年初版発行された。16×23cm の横長の絵本で、緑色の画面に 2 羽のひよこが向かい合っている絵の表紙を持つ。ページを開くと、白の画面に、花、虫、小動物が次々と現れる。第 5 版を用いて、以下に翻訳を試みる。

p.1	Itt a tavasz! Itt van! Itt! A barackfa kivirít!	春が来た！ 来たよ！来た！ 桃の木が咲いた
	Virágcsipke minden ág. Csupa virág a világ.	すべての枝は レースのように花をつけ 世界は花でいっぱい
p.2	Méhek szállnak csapatban, egész méhe-vihar van.	蜂がとぶ 群れをなす 大軍の蜂は嵐のようだ
	Lepkék, hangyák, bogarak napsugárban zsonganak.	蝶、あり、 甲虫 日の光の中でざわざわ
p.3	Falu végén, a réten golya sétál kevélyen.	村はずれの 草地では コウノトリがいばって歩く
	Csőre csattog: kelepel. Kérdi: „Van-e eledel?”	くちばしをカチカチ 食べるものはあるか、 と聞いている
p.4	Hét mezőben valahol traktor dübög, zakatol.	7つの畑の どこかで トラクターがドスン、がたがた
	Traktor dübög, muzsikál, s hét mezőben áll a bál.	トラクターがドスンドスンと 奏でて 7つの畑はにぎやか
p.5	Hát a három cimbora: eke, henger, borona?	さあ、この3つは 仲間 鋤、ころ、鍬
	Mi dolga van, mit csinál? Vetőgéppel szaladgál.	何の用がありますか 何をしているの？ 走って種まき機についていく
p.6	Őszi búza zöldell már. Kicsi haris benne jár.	秋小麦は もうあおあおとし その中を小さなウズラクイナが通る
	Zöld búzában fia-nyúl bukfencezni most tanul.	緑の小麦畑で 若うさぎは 今でんぐり返りを習っている
p.7	Tojáshéjből kiscsibe most lép a nap elibe.	卵の殻から 小さなひよこは 今太陽の前へと踏み出す
	Kicsi kacsá mondja: „Sáp! Be gyönyörű a világ!”	小さなかもは言う 「シャープ！ なんて世界は美しいのでしょう」と

p.8	Tarka boci, bicegő, rétre mehet, ha megnő.	まだら模様の子牛は よちよち歩き 大きくなったら草地に行けますよ
	Ma lett éppen egynapos. Azért ilyen aranyos.	今日は 生まれて一日目 だからこんなにかわいい
p.9	Hát a fecske mit csinál? Csőrében egy szénaszál.	さあ、つばめは 何をしているの? くちばしには干し草
	Fészket épít magának meg a hét kis fiának.	自分のために 7羽のひなどりのために 巣を作っている
p.10	Kicsikó fut – futtában csengő cseng a nyakában.	子馬が走る 走っている間 首の鈴が鳴っている
	Kicsi csengő, kiscsikó, futni és csengetni jó.	小さな鈴 子馬 走ると鳴っていいね

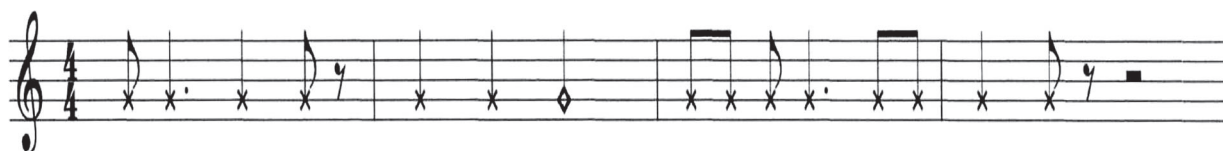
1-2. 『Itt a tavasz』の解釈

花が次々と咲き、明るい春に心躍る展開である。G. エルジは桃の花が一斉に咲き、レースのようだと表す。R. カーロイは桃の花の他、チューリップ、けし、すみれと思われる花も描き、野の草にも花を咲かせている。いずれのページを開いても、咲いている花を見つけることができる。花には蜂が群れ、蝶、あり、てんとうむしのうごめく音が聞こえだすようである。読者はコウノトリがくちばしを鳴らす音や、トラクターの弾む音にも、心が動くのを感じるのである。春は、生物が動き出し、生命感に満ちる時である。さらに種まきをして、新しい芽吹きを期待する。

後半は、小動物が登場する。ウズラクイナ、うさぎ、ひよこ、かも、そして子牛、子馬が草地の上を行き、ツバメは巣を作ってひなを育てる。R. カーロイの描く動物は優しい目をしており、G. エルジの語りかけにこたえているように見える。

3行詩のまとまりは、心地よいリズムを創り出している。「á」のような長母音の響きが耳に優しい。例えば p.1 の第2センテンスは、1音節を1音符に表し、長母音はより長い音価の音符を当てはめると楽譜1のようなリズム譜に示すことができる。

また、接尾辞の「k」が押韻となり、楽譜2, 3のようなりズムを生み出している。このような言葉のリズムが、穏やかな明るさへと読者をいざなう。



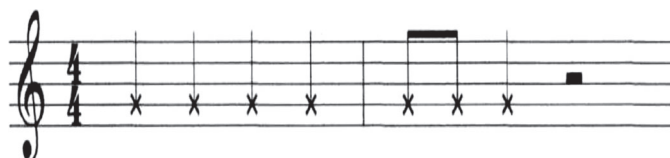
Vi - rág csip - ke min - den ág. Csu - pa vi - rág a vi - lá - g.

楽譜 1 p.1 第 2 センテンス読み方のリズム



Mé - hek száll - nak csa-pat- ban,

楽譜 2 p.2 第 1 センテンス 1 行目読み方のリズム



Lep - kék, han - gyák, bo - ga - rak

楽譜 3 p.2 第 2 センテンス 1 行目読み方のリズム

2. 『Itt a nyár』の翻訳

絵本『Itt a nyár』も同じく Móra 社より、1977 年初版発行された。16×23cm の横長の絵本で、白い表紙に、太陽が描かれている。この太陽は、目、鼻、口が描かれ、身体があり、帽子、服、靴を身に着けている。ページをめくると、各見開きには目、鼻、口のある太陽が載せられており、太陽に各場面を語らせていることがわかる。1 ページ目と 9 ページ目には 4 行詩が二つあり、他のページは 4 行詩から成る。9 ページ目は、裏表紙を兼ねている。第 3 版を用いて翻訳を試みる。

p.1	Itt a nyár! Itt a nyár! Táncot jár a napsugár. Aranyhaja, ruhája libeg-lobog a táncba’.	夏が来た! 夏が来た! 日の光が踊り 金髪、洋服は 踊りにゆらゆらと揺れる
	Szundikál az iskola, napsugár se jár oda. Kirándul az egyszeregy, Az Ábécé-hegyre megy.	学校はお休みで 日の光さえそこには届かない 1×1 さんは ABC 山へ遠足に行く
p.2	Táncos sugár rétre lép, kinyílik a margarét. Pipacs neki integet: „Öleljél meg engemet!”	踊る光は草地を踏み マーガレットの花が咲く ひなげしは光に向かって 「私をだきしめてごらん」と手を振る
p.3	Kis patakból halacska hozzászökken kacagva. Papírhajót visz az ár. Papírhajón napsugár.	小川から魚が 太陽に向かって喜び笑う 流れが折り紙の船をつれていく 折り紙の船に光をのせて
p.4	Kanyarog a kis patak, kertek alatt elhalad. Pironkodik az alma, napsugárhoz szaladna.	小川はくねくねながれ 庭の裏を通り過ぎる りんごは照れて赤くなり お日様の方に走りたくなる
p.5	Nyári alma ágáról le is ugrik magától. Köszönti a vendéget, örömeiben megérett.	あおいりんごは枝から 下へ向かって飛び降りる お客様を出迎えて 嬉しくて赤くなった
p.6	Tovalibben napsugár, játshatóterem meg-megáll. Megcsókol egy kisfiút, kislányhoz is odafut.	日の光は軽くゆうがに飛び去り 遊び場に立ち止まったりする 男の子に口づけし 女の子のところへも走っていく
p.7	Leng a hinta, léggömb száll... Nézi, nézi napsugár; homokvárból a király cifra lován ki-be jár.	ブランコが揺れ、風船がとぶ 日の光はずっと見ている 王様が鮮やかな馬に乗って 砂の城の外と中を行ったり来たりする
p.8	Továtáncol pajkosan hegyen, völgyön, városan. Nézi magát kedvére a Balaton tükrebe’.	太陽の光はおちゃめに踊りながら 山を、谷を、町の上を通り過ぎる 太陽の光は心ゆくまで自分の姿を バラトン湖の水鏡で見ている
p.9	Búzafieldön napsugár így szól: „Arany a határ. Én neveltem, becéztem, aranyporban fürdettem.	日の光は小麦畑に こんな風に言う「畑は金色、 私が育て、愛撫し、 金の粉を浴びさせた
	Simogattam, csókoltam. Este el is altattam.” S lám, itt van a búcsúzás: kezdődik az aratás.	撫で、口づけし 夜には眠らせた」 さあ、お別れ 刈りいれがはじまる

2-2. 『Itt a nyár』の解釈

表紙の太陽は人の姿をしており、アニミズムの存在として描かれている。夏の太陽は至るところを照りつける。

まず G. エルジは、計算式や文字さえも校舎内には存在しない、と休暇中であることを比喻して表している。これを R. カーロイは 1×1 の計算式を山登りする子どもに見立て、その山肌から ABC の文字が浮き上がるように描き、休暇中の子どもたちが野外で活動していることを示している。

黄色の太陽、オレンジ色の花、緑の草木、赤い実、いずれもが鮮やかで、勢いを感じさせるものである。その中で特に目を惹くのは、青色で描かれた水の流れである。庭の裏を流れる小川が、飛び跳ねる魚や折り紙の船を運びながら、ページの端から端にまで至る。エネルギー溢れる場面である。

その風景の中で R. カーロイは、砂場で砂の城を作って遊ぶ子どもを描いた。そこに馬に乗った王様が現れると、一気にファンタジーの世界が広がる。

ここで、砂場での遊びについて触れる。日本の子どもは、砂を掘り、砂を盛り上げ、小山を作り、トンネルを通し、川を作って水を流す、という遊びをする。これに対して、ハンガリーの子どもは砂の城を作るのである。写真1はブタペスト市保育園の園庭の砂場で子どもたちが作ったものである。これはまさに、砂の城であると言える。ブタペスト市のドナウ川西側の山地には、再建されたブダ城、要塞がそびえたつ。子どもたちが砂場で再現しているものは、城であり、日本の子どもの砂遊びの感覚とは異なる。そのような文化を垣間見ることができるページとなっている。



写真1 ブタペスト10区 Harslevelű 保育園の砂場
(2023年5月4日、筆者撮影)

さらに読み進めると、太陽は上空からバラトン湖をながめ、バラトンの水鏡に自分の姿を映してうっとりしている、という雄大なシーンとなる。バラトン湖は、ハンガリーの西部に位置し、東西に長く広がる。595km²の大きさは、海のない国ハンガリーにとって、海と呼ぶ存在であり、特に春から夏にかけての景色が美しく、各地から観光に訪れる（写真2）。ハンガリー人にとってバラトン湖は、愛すべき場所なのである。バラトン湖南湖畔で育った R. カーロイにとって、太陽がバラトン湖の水鏡で遊ぶさまは、特別にいいものであろう。

最後のページでは、山の向こうへしずもうとする太陽の語りが記される。収穫の 때가近づきつつある麦の穂を見つめている。夏が過ぎて、和らいだ光の中で語られるページとなっている。



写真2 バラトン湖の水鏡(2023年5月1日、筆者撮影)

3-1. 『Itt az ősz』の翻訳

Móra 社より 1978 年初版発行された『Itt az ősz』は、16×23cm の画面を横につなげ蛇腹折にした装丁である。横に広げて、表面、裏面を連続に見ることもできる。銃を持つ番人が最初と最後の場面に登場する。赤茶色、黄色、グレーといった色調で、山、家、果物、鳥が描かれる。

p.1	Itt az ősz! Itt az ősz! Szőlőhegyen jár a csősz. Vállán villog puskacső, Levegőbe belelő: Dirr-durr! Belelő.	秋が来た! 秋が来た! ぶどう畑の番人がぶどう山へ行く 肩の上で銃がちかちかする 大気に向けて撃つ ディッル デュッルと撃つ
p.2	Menekül a szarkahad. Éhes seregélycsapat víg szüretből kimarad.	かささぎの大群は逃げ おなかをすかしたむくどりの群れは ぶどう摘みに参加できなくなってしまう
p.3	Megérett a körte, alma, rád mosolyog piros halma. Almahegy, körtehegy kirándulni boltba megy.	洋梨、りんごが熟れた 赤い山はあなたを見て微笑む りんご山、洋梨山 ハイキングはお店に出かけること
p.4	Ni, a fecskék! Ni, a fecskék dróton ülő hangjegyecskék. Őszi szelek megtanulták ezt a kottát, s fújják, fújják.	見て、つばめたち、見て、つばめたち 電線に座っている小さな音符 秋の風がこの楽譜を丸覚えし ずっと歌っている
p.5	Hát a gólyák merre járnak? Piramisok felé szállnak. Árva fészük várja őket, míg tavasszal visszatérnek.	さあ、コウノトリはどこにいるの? ピラミッドに向かって飛んでいる 空っぽの巣が待っている 春に戻ってくるまで
p.6	Vadlibák, vadlibák szárnya búsan az eget szántja. Búcsúznak nádi világtól, s kiúsznak lassan a tájból.	雁、雁の羽 物悲しく空を飛ぶ 葦の世界に別れを告げ ゆっくりとこの景色から泳いでいく
p.7	Álmos a kertben a hinta, karjait ölébe ejti. Nem táncol véle Katinka. Nem ül az ölébe senki.	庭のブランコは眠たく 腕を膝に落とす カティンカはブランコとは踊らず その膝には誰も座らない
p.8	Hol a homokvár büszke tornya? Tatár dülta fel vagy török? Romja maradt csupán, egy bucka, s fahídja, az is eltörött.	砂の城の自慢の塔はどこですか タタール人もしくはトルコ人が荒らしましたか 一つの塚は、ただ遺跡だけが残った そして木の橋も壊れてしまった
p.9	Hideg esők, hideg szelek... Hullnak a fákról levelek. Ködöt pipáló hajnalok fújnak a fákra harmatot.	冷たい雨、冷たい風 木から葉が落ちている 霧を吹く夜明けは 木に露を置く
p.10	Messziről int a napsugár: Elmúlt a nyár! Elmúlt a nyár! Hazaballag hegyről a csősz, s átveszi őrhelyét az ősz.	遠くから日の光が招く 夏は過ぎ去った、夏は過ぎ去った 番人は山から歩いて帰り、 秋が見張り番を引き継ぐ

3-2. 『Itt az ősz』の解釈

『Itt az ősz』では、落ち着いた色調の中、かささぎ、むくどり、コウノトリ、雁が、順番に飛び去っていく。つばめだけが電線の上に集まって、鳴いている。R. カーロイは、電線を五線譜に、つばめを音符に見立てて、楽譜のように描いた。秋風が吹く中、ユーモラスな場面となっている。

蛇腹になった後半の7ページでは、誰も乗らなくなったブランコと、詩には現れない一羽のにわとりが描かれており、人がいない寂しさを強調しているようである。そして、読者にとって理解しがたいのは、続く8ページの、タタール人、トルコ人が砂の城を荒らした、との部分である。古来ハンガリーは、蒙古襲来、モハーチの大敗といった、異国民の襲撃を経験している。G. エルジはこのことを突然に記すのである。それに対してR. カーロイは、戦いや破壊の描写ではなく、枯葉散る道を犬が歩いている場面として描いている。このような描き方をしたR. カーロイの意図は何であろうか。その疑問を残したまま、深まる秋の景色へと進んでいく。

Ⅳ. 考察

桃の開花に始まり、花々が咲き誇り、生き物は生き生きと春の営みを楽しむ。『Itt a tavasz』は、そんなハンガリーの春の賛歌である。

『Itt a nyár』は、太陽の光の達する場の躍動が描かれる。アニメズムの存在となった太陽が、至る所を照らし微笑みながら見守っている。そのまなざしはバラトン湖へも注がれる。このようにG. エルジの詩は郷土愛に貫かれている。さらに、麦の穂の成長をいとおしく思い、収穫の祝福に包まれている。それぞれの場면을的確に描くR. カーロイもまた、郷土愛の持ち主であろう。

これらの絵本の中で、砂の城は重要な位置を占めると考える。子どもが作った砂の城から王様が現れ、ファンタジーの世界に誘われる。ハンガリーの歴史においては王が国を治めた実際があり、『Itt a nyár』では、砂の城を一旦出現させて、そのことを回想している。しかし、『Itt az ősz』においては、G. エルジは砂の城を荒らしたのは誰か、と問う。衝撃的な展開である。一方R. カーロイは、この場面においても深まる秋の

光景を粛々と描き続けており、読者は秋の物悲しさを感じるものの、翻訳を読むまではこの悲惨な内容には気づかない。つまり、G. エルジが痛恨の極みで絞り出した言葉に対して、R. カーロイは忠実に絵にする方法を探っていないのである。絵本作家の五味太郎は、「絵が文章を説明するなんていうのではなく、絵は絵なりに、文章と微妙な関係を持ちながら、ややバラバラに進行していく、というとても大きな構造」をもつ絵本が存在すると述べている（五味1999）。『Itt az ősz』もそのような構造なのだろうか。そうであれば、砂の城をめぐる、R. カーロイは画家としての主体性を保ち描いたと考える。G. エルジの詩人としての執拗ともいえる表現とR. カーロイの泰然とした描き方によって、自国の不幸な歴史をいまだに、そして永遠に飲み込むことができないハンガリー人の苦悩と、郷土愛の双方向へ、振り子のように読者をいざなう。『Itt a tavasz』は生命感に、『Itt a nyár』は躍動感にあふれ、『Itt az ősz』は物悲しくも美しい。そして、3つの絵本を貫くのは、郷土愛と生きるものへの祝福である。

残された課題

本稿では絵本『Itt a tavasz』『Itt a nyár』『Itt az ősz』翻訳の草稿を提示した。これら、押韻が多くみられ、言葉のリズムが心地よい。そのような語感のままに、日本語でも読むことはできるのだろうか。探求が続く。

謝辞

翻訳に際し、NPO ココペリ 121 のPápai Eszter氏の助言を頂いた。お礼申し上げます。

資料

- Gazdag Erzsi/Reich Károly (1967) Itt a tavasz. Móra Könyvkiadó
 Gazdag Erzsi/Reich Károly (1977) Itt a nyár. Móra Könyvkiadó
 Gazdag Erzsi/Reich Károly (1978) Itt az ősz. Móra Könyvkiadó

今岡十一郎編 (2009) 簡約ハンガリー語辞典. 大学書林

早稲田みか、岡本真理、バルタ・ラースロー (2012) ハンガリー語単語集. 白水社

「vulkán Adys」<https://adys.org/>

羽場久美子 (2018) ハンガリーを知るための 60 章ドウの宝石. 明石書店

ハンガリー絵本原画展 レイク・カーロイを訪ねて.18

注

1. マレーク・ヴェロニカ、徳永康元訳 (1965) ラチとらいおん. 福音館書店
2. 例えば、マレーク・ヴェロニカ、羽仁協子訳 (2003) ブルンミとアンニパンニ. 風涛社、およびマレーク・ヴェロニカ、羽仁協子訳 (2005) くさのなかのキップコップ. 風涛社
3. 例えば、バーリント・アグネシュ/レイク・カーロイ、内川かずみ訳 (2007) とんぼの島のいたずら子やぎ. 偕成社
4. ゼルク・ゾルターン/レイク・カーロイ、マンディ・ハシモト・レナ訳 (2011) さんびきのうさぎ. 文芸堂
5. 例えば、ヤニコブスキー・エーヴァ/レーベル・ラースロー、マンディ・ハシモト・レナ訳 (2005) もしもぼくがおとなだったら. 偕成社

引用文献

絵本専門士委員会 (2020) 認定絵本士養成講座テキスト. 中央法規 17, 23, 26

五味太郎 (1999) 絵本をよんでみる. 平凡社.p.20

鈴木文恵 (2019) 夢見る美しき古都ハンガリー・ブダペストへ. イカロス出版.8-9

森本俊司 (2015) ディック・ブルーナ ミッフィーと歩いた 60 年.42, 199

早稲田みか、コヴァーチ・レナータ (2019) ハンガリー語の入門改訂版. 白水社.3

早稲田みか (1993) ハンガリーにおけるナショナリズムと言語. 津田幸雄編. 日本人と英語: 英語化する日本の学際的研究. 国際日本文化研究センター.139-140, 144

Reich Károly Original Paintings (2007) Exhibition

